

編集後記

<編集顧問>

鈴木 秋悦
武田 佳彦
青野 敏博

<編集委員>

岡井 崇
神崎 秀陽
倉智 博久

最近, Women's Health Initiative (WHI) の再解析結果が発表されました (Rossouw JE, Prentice RL, et al: JAMA 297: 1465, 2007). これは, HRTは閉経後早期から始めれば心血管系疾患を抑制する傾向がみられ, 総合的な「好ましき (global index)」もよい傾向を示したというものです. そもそも, 2002年のWHIの研究デザインについては, 対象年齢が一般的なHRTの施行とかけ離れて高齢であることに疑問の声が上がっていました. ほかの研究でも, 閉経早期からHRTを開始すれことが好ましいとの結果も発表されています.

HRT施行の可否についての, 最近10数年間の論議を振りかえってみますと, 1990年代の「HRTはとにかくよい. すべての閉経後女性に施行すべき」から, 2000年に入ると「HRTは危険であり, できるだけ施行すべきでない」, そして現在は, 「更年期症状などを勘案して, 個別化して施行すべき」と, 大きく変遷しました. 物事の考え方は, 左右に大きく振れてちょうど真ん中に落ち着くという典型的な例かも知れません.

現在の産婦人科の不人気と産婦人科医の不足も同じことで, 今の困難な時期をうまく乗り越えられれば, 産婦人科も人気の高い, 多くの学生や研修医が選択してくれる診療科となれる可能性があります. 最近, 行政やマスコミの後押しもあり, 少しそのような期待を抱かせる雰囲気もあるように感じています. 本誌の編集委員の一人である岡井崇先生がこのたび書かれた小説『ノーフォールト』も, 大きな後押しになるものと思われます.

こんなときこそ, われわれがいっそう診療, 教育, 研究に力を入れて頑張らねばならないと思います.

(倉智 博久)